IPM実践指標（　カキ　）

分類		管理項目		管理ポイント	チェック欄		
					昨年度の実施状況	今年度の実施目標	今年度の実施状況
予防	病害虫・雑草の発生しにくい環境の整備	間伐		縮・間抜により病害虫が発生しにくい環境を作る。			
		せん定		樹冠内部の通風・採光を良好にし、病害虫が発生しにくい環境を作るとともに、薬液散布における付着の死角をなくす。			
		病害発生源の除去		炭疽病等の罹病枝、罹病果は除去する。			
		残さの処理		せん定くずや落葉、落果はほ場外に持ち出し、適切に処分する。			
		害虫発生源の除去	除草	ハダニ類、カメムシ類等の害虫の発生源となる園内および周辺を除草する。			
			粗皮剥ぎ	フジコナカイガラムシ、ヘタムシ、コスカシバ、マダラメイガ等は樹皮下で越冬するので、冬期に粗皮剥ぎを実施する。			
		雑草適期管理		種子で増殖する雑草の発生を少なくするために、結実前に除草を実施する。			
		施肥	有機物の投入	有機質を適切に施用し、樹勢・根活性を良好に保ち、病害の発生しにくい樹体にする。			
			適切な肥培管理	窒素過多による軟弱徒長枝は病気が発生しやすいので、適切な肥培管理をする。			
		新梢管理		枝梢の遅伸びや二次伸長をしない栽培管理を行い、病害の発生しにくい樹づくりをする。			
		防風対策		風傷の発生を少なくし病害の発生を抑えるために防風対策（防風樹、防風ネット等）を講じる。			
		収穫、貯蔵時における果実の適正措置		果実は適熟果を適期に収穫し、取り扱いに注意して貯蔵中の傷みを最小限に抑える。			
				輸送中のイタミを少なくするため、収穫は朝露が乾いて行い、また日中の高温時は避ける。			
		健全な苗木・穂木の使用		新植及び改植時には無病苗木を植え付ける。接木時には無病穂木を使用する。			
判断	防除要否・タイミングの判断	病害虫発生予察情報等の確認		病害虫防除所が発表する発生予察情報や普及指導センター等が出す病害虫に関する情報を入手し、発生状況を確認する			
		気象状況の把握		気象情報を把握し、適切に防除を実施する。			
		病害虫の発生状況の把握		定期的に園内を見回り、病害虫の発生状況を観察及び確認する。			
		フェロモンとラップによる予察		性フェロモン剤（フジコナカイガラムシ、コスカシバ等）により、発生時期を予察し、適期防除を行う。			
		雑草の発生状況の把握		果樹園及びその周辺に発生している雑草の草種と発生量を観察及び確認する。			

IPM実践指標（　カキ　）

分類		管理項目		管理ポイント	チェック欄		
					昨年度の実施状況	今年度の実施目標	今年度の実施状況
防除	生物的防除	天敵類の確認		園内に発生する天敵類を把握する。			
		チョウ目害虫類	生物農薬の使用	若齢幼虫を対象にBT剤を利用する。			
	物理的防除	フジコナカイガラムシ、ヘタムシ	誘引バンド	フジコナカイガラムシ、ヘタムシに対する誘引バンドを10月末までに樹幹部に巻き付け、3月末までに除去し、適切に処分する。			
	化学的防除	農薬の使用全般		十分な薬効が得られる範囲で最少の使用量となる最適な散布方法を検討した上で使用量・散布方法を決定する。			
		適正な散布方法		散布ムラがないよう、適切な散布量で散布する。特に、SSの場合は適切な速度、間隔で走行する。			
		剤の選択		薬剤感受性の低下を防止するため、同一系統の薬剤を連用しない。			
				天敵に影響の少ない薬剤を選択する。			
				化学農薬に対する感受性の低下を抑制するため、物理的防除効果のある剤を組み入れる。			
				除草剤を使用する場合は雑草の発生状況や草種を確認し、適切な剤を選定する。			
		フジコナカイガラムシ	樹幹塗布	フジコナカイガラムシ対策として、ジノテフラン剤を樹幹に塗布する。			
		農薬飛散防止対策		農薬散布は、無風～弱風時に飛散が少ない散布器具を使用するなど、他の作物などに飛散しないように、適切な飛散防止策を講じる。			
		散布後の処理		散布器具、タンク等の洗浄を十分行い、残液やタンクの洗浄水は適切に処理し、河川等に流入しないようにする。			
その他		土壌の流亡防止対策		のり面の保守等によって土壌流亡の防止に努める。			
		作業日誌の記帳		各農作業の実施日、病害虫・雑草の発生状況、農薬を使用した場合の名称、使用時期、使用量、散布方法等栽培管理状況を記録する。			
		研修会等への参加		県や農業協同組合が開催するIPM研修会等に参加し、情報収集に努める。			